

教育実習評価表からみる教育実習学内指導の課題（２）

－ R6 年度教育実習生の実習評価表と授業評価妥当性の検証－

上村 裕樹¹⁾・君島 智子²⁾・宮本美和子²⁾・金野 麻衣²⁾・
小森谷一郎²⁾・後藤さくら³⁾・大曾根 学⁴⁾

(¹⁾東北福祉大学教育学部・²⁾聖和学園短期大学保育学科・³⁾東北福祉大学・⁴⁾聖和学園短期大学)

I. 問題と目的

幼稚園教諭の養成にあつては、文部科学省(2018)「教職課程認定基準等について」において、教職課程を履修し免許状を取得した学生は、認定課程を有するどの大学を卒業しても教員としての最低限の知識・技能は有しているとみなされとの前提にたった教育が実施されることが養成大学等（以下、養成校）には求められることが示されている。そして、教育職員免許法において、認定課程を有する大学は、学生が免許状に係る所要資格を得るために必要な科目の単位を修得するにあつては、当該認定課程の全体を通じて、当該学生に対する適切な指導と助言を行うことが定められており、単位認定、免許付与における養成校の責任を示している。新沼ら（2021）は、こうした養成の責任に対して、資格免許を付与することが目的ではなく、学生の先にいる子どもや保護者の最善の利益を見据えた教育の提供の必要性について示しており、本研究においても、同様の視点から、養成教育における単位認定に関わる授業評価の妥当性について、検証したい。

教育実習は、先行研究（上村ら；2024）においても示したが、教育職員免許法に規定されている必須の科目であり、一定期間、教育の場において実地体験を通して、教師としての必要な知識や技能、態度、心構え、さらに

はあり方などを習得するために行われている。そして、教育職の職務の実際について見学し、観察し、体験し、経験を積むことを通して、体験的な学習の機会としての役割を担っているため、養成校で培った知識や技能を実際の教育現場で実践し、教員としての資質を涵養する重要な機会であり、その実習の成果を評価する実習評価表と、養成校における授業単位認定に係る授業評価の妥当性を検証することにより、教育の質保障と学生の成長促進において極めて重要である。実習施設から示される教育実習評価表と養成校における授業単位認定に係る授業評価の妥当性を検証により、教育の質の保障と学生の学びの質の向上に繋げていきたい。

まず、評価基準の明確化と共有は、評価の客観性と透明性を高める上で不可欠である。これまで、実習施設と養成校では、評価項目や基準において認識のずれが生じる可能性があるとされてきたが、これまで実習評価と授業評価との妥当性を検証するということはあまり行われてこなかった。しかし、実習施設と養成校では、評価において重視する観点が異なる可能性があり、こうしたずれは、学生の学習において混乱を招く可能性もある。そのため、検証を行うことで、評価の透明性を高め、評価者の主観ではなく、客観的な視点での評価が行われていることへの信頼性が

高まると考える。

次に、妥当性の検証は、実習と授業の連携強化へと繋がり、学生の学びを深める上で重要な役割を果たすと考ええる。実習での学びと養成校の授業内容のつながりが明確になることで、学生は実習で得られた経験を授業で振り返り、理論と実践を統合的に学ぶことができる。

例えば、実習での保育実践において、失敗したり課題に直面した際に、授業で学んだ理論や他の事例を参考に解決策を検討出来れば、より深い学びへとつなげることができる可能性が高い。また、養成校が、実習において学生が直面しやすい課題を把握し、授業内容を改善することで、より実践的な教育を提供することが可能となる。こうした連携は、双方が互いの実際を知ることや評価の観点、学びの視点を深く理解しようとするところから、図ることが可能となるものであると考えられる。このように、学生が学ぶ場である養成校と実習施設の連携が進めば、学生の学びの質の高められ、保育者としての実践力の効果的な育成が図られると考える。

客観的な評価により、学生は自身の強みと弱みを正確に認識することが可能となる。例えば、実習評価で日誌や指導計画等の記録は高く評価されたが、子どもへの関わりや言葉がけの工夫が課題として指摘された場合、学生は自身の強みとして、観察力や分析力が高いこと、構成し見通す力は高いことなどが明らかとなると同時に、直接的な子どもへの関わりにおける言葉がけや子どもを見守る姿勢、子どもの育とうする姿への信頼した関わりの弱さなど、改善点を明確に認識できる。具体的な改善点や目標が明確になることは、学習の課題が明確になり、改善・解決のための方法を自ら考えることが可能となるため、学習意欲や自己成長への意識が高まり、主体

的な学びを促進しやすいと言える。実習と授業を通して、学生は理論と実践を往還しながら、より実践的な力を身につけることができると考える。

そして、こうした一連の効果検証は、養成校の教育改善へと繋がる。実習評価と授業評価の関連性を分析することで、教育プログラム全体の課題が見えてくる。評価結果を基に、カリキュラムや指導方法の改善を行うことで、教育プログラム全体の質を高めることが可能となる。教育の質向上と学生の学びと成長を支えることは、養成校の重要な使命であり、こうした検証を継続的に実施し、改善を重ねていくことで、より良い保育者養成が実現すると考えている。

そこで本研究では、令和6年度の実習における実習評価と養成校における授業評価について分析検証した。これらを通して、今後の養成課程における教育実習指導の課題と方法について、検討する。

Ⅱ. 方法

1. 対象

A短期大学の教育実習（幼稚園）において、令和6年度の実習に参加した学生（令和5年度入学生）を対象として、実習評価とGPAに関して分析した。その対象となる学生数は87名であった。

1) 実習評価表

実習評価表は、2年次前期に行われる教育（幼稚園）実習において、実習施設から示される評価である。

本研究において有効回答として取り扱った件数は、有効回答数件82（欠損数5）であった。実習を終えていない、もしくは実習施設から評価が示されていない（評価不能・項目該当無し等）などの実習評価結果については、欠損として扱った。有効率は94.25%で

あった。

2) 授業評価

授業評価は、令和5年度入学生（令和6年度2年生）の授業評価におけるGPA（Grade Point Average）を活用した。GPAは、各科目の成績から特定の方式によって算出される授業評価値であり、4を最大値として0までのポイントを総単位数によって平均化することで算出されるものである。対象者の確定している成績（1年前期・1年後期・2年前期）を対象に算出されたGPAを活用している。対象となる学生は87名であり、有効件数は、実習評価表が示されている学生分となるため、82件（有効率94.25%）であった。

2. 実習期間

令和6年5月から令和6年6月の期間において、原則20日間（4週間）の教育実習（幼稚園）に取り組んだ。実習園は、原則各自の希望にて実習施設を選択した幼稚園及び認定こども園であった。

3. 手続き

本研究では、実習評価表および授業評価を分析対象データとして、分析を行った。分析にあたっては、IBM SPSS Statistics ver29を用いた。

教育実習における実習評価表は、宮城県では、養成校共通の評価表を活用している。

教育実習評価表評価項目は15項目であり、その評価内容は大きく2つの項目（実習態度・実習内容）で構成され、各項目5段階（5を最大、1を最小）にて評価がなされる。

実習態度は、健康・礼儀・積極性・責任感・協調性・探究心の6項目である。

実習内容は、幼児の理解・環境の配慮・指導計画・保育の実践（4項目置かれているため、それぞれの内容を区別するために項目を保育の実践①—④をつける）・提出物等・反省の9項目であり、それぞれ評価の観点と共に表示される（表1）

表1 評価項目と評価の観点

評価の項目		評価の観点
実習態度	健康	健康管理に留意し、心身共に元気に過ごした
	礼儀	身だしなみが清潔で、言葉遣いや挨拶などが適切であった
	積極性	実習の意義を理解し、目的を持ち積極的に活動した
	責任感	与えられた仕事は責任をもって成し遂げた
	協調性	指導者の助言を素直に受け入れ、職員と協力して仕事をした
	探究心	絶えず問題意識をもち、研究的な態度であった
実習内容	幼児の理解	幼児の中にとけこみ、積極的に理解しようとする姿勢が見られた
	緊急の配慮	保育に必要な環境構成に配慮し、また保育室内の整備や美化に務めた
	指導計画	幼児の発達に即した計画や準備ができた
	保育の実践①	幼児の発達段階を考慮し、幼児の興味を引き出して保育展開ができた
	保育の実践②	言語・音声は幼児にわかりやすく適切であった
	保育の実践③	基礎技能（音楽・絵画製作など）を発揮できた
	保育の実践④	個別指導にまで気を配ることができた
	提出物等	日誌、指導案等の提出物の期限を守ることができた
	反省	自分の実習を振り返り、翌日の保育に活かそうと努力した

4. 倫理的配慮

本研究は、「聖和学園短期大学研究活動に関する倫理規定」に従い、研究に取り組んだ。

実習評価表を取り扱う上で、学生には学生の個人が特定されない形で今後の教育内容と方法の検討のために、研究にて取り扱う旨説明し、了解を得ている。

授業評価と実習評価は教務事務が管理しており、教員は学生指導や授業評価等の場面においてのみ触れるものであるため、本研究では、分析にあたって、教務事務において、評価データに示される個人の氏名を外し、ナンバリングを施し、学生個人の特定ができないよう配慮した上で、授業評価はその指標とし

てGPAを用い、実習評価は評価項目における評価数値を分析の対象とした。

5. 教育実習プログラムについて

既述しているA短期大学の教育実習における事前事後指導のカリキュラムは、下記のとおりである（表2、表3）。教育実習が2年次の5月末から6月にかけて行われるため、1年次の4月にはオリエンテーションを行い、観察実習、部分実習、予備実習といったステップアップ方式を取り入れ、充実した教育実習（本実習）が行えるよう努めるとともに、実習後は実習報告会や交流会を通して、本実習での学びを深められるよう努めている。

表2 教育実習事前事後指導Ⅰ（1年次）の実施内容

月	内 容
4月	オリエンテーション 教育実習の目的と意義の理解 2年間の計画について 教育実習先希望調査
7月	観察実習ガイダンス（全体）観察方法、記録方法 準備物について
8月	観察実習ガイダンス（全体）指導案の流れについて
9月	観察実習（聖和幼稚園と協力幼稚園にて一日ずつ2日間） 観察実習反省会（全体・グループ）
11月	交流会（全体・グループ）1・2年合同による指導案、教材研究、保育実践
11月、12月	実習報告会（全体・グループ）2年生による教育実習からの学びの伝達
1月	部分実習ガイダンス（全体・グループ）目的と内容、教材研究
2月	部分実習（聖和幼稚園にて1日間） 部分実習反省会（全体・グループ）
3月	予備実習・本実習に向けたガイダンス（全体）対象児別実習内容について

観察実習は、9月初めに2日間、一人2箇所の幼稚園で実施（A短期大学の附属であるB幼稚園と協力園）している。観察実習は初めての実習となるため、事前指導として園の流れや準備について丁寧に指導を行っている。また、事後指導では、実習記録を提出させ、9人の専任教員が担当するグループの学

生を指導している。11月から12月にかけては、実習報告会を行い、1年生は2年生から幼稚園・保育所・施設の3実習について報告を聞く機会を設けている。実習報告会では、2年生の実習報告資料集を1年生にも配布し、実習前の準備物の紹介や実演等も行い、モデル型学習を取り入れ、1、2年生が双方

に学べるよう実習プログラムを組んでいる。

部分実習は、2月に1日間、仙台市内のB幼稚園において実施している。幼稚園の1日の流れと保育者の役割を学ぶことを目的とし、事前指導では、担当部分の流れに沿って教材を準備し、実践を想定したロールプレイをグループごとに行っている。今年度は部分実習の指導案も事前に作成させ、本実習を想定した実習体験ができるようにした。また、実習終了後はB幼稚園にご協力をいただき、

担任教員による指導を行っていただいている。帰校後の事後指導としては、部分実習反省会（グループ）の実施と教員による日誌の指導を行い、今後の課題について、全体で学びの振り返りを行っている。このように一つ一つの経験を丁寧に振り返るなかで、学生が幼稚園で経験した学びを共有化し、本実習でその学びを発揮できる実習プログラムを目指している。

表3 教育実習事前事後指導Ⅱ（2年次）の実施内容

月	内 容
2月～4月	予備実習ガイダンス（全体・グループ）予備実習の概要・計画、活動案 予備実習（聖和幼稚園で半日）
4月	予備実習ガイダンス（全体・グループ）予備実習振り返り
	教育実習ガイダンス（全体）教育実習の概要、打ち合わせについて
5月	教育実習ガイダンス（全体）教育実習に向けての心構え
	教育実習ガイダンス（全体・グループ）実習課題等
5月～6月	本実習（各幼稚園にて教育実習20日間）
6月	教育実習反省会（全体・グループ）
10月	実習報告会準備（全体・グループ）資料作成、模擬保育
11月	交流会（全体・グループ）1・2年合同による指導案、教材研究、保育実践
11月、12月	実習報告会（全体・グループ）1年生への教育実習の学びを伝達

予備実習は、3月から4月にかけてB幼稚園で行っている。事前指導では、事前準備、観察の観点、教材研究について指導しており、実習担当が巡回にて指導を行っている。事後指導としては、予備実習報告会（全体）にて実施内容と反省点の伝達を行い、予備実習反省会（グループ）にて実習記録の指導を行っている。

本実習は、5月末から6月に20日間実施するため、実習の手引きを基に事前指導を行い（全体及びグループ）、事後指導では、教育実習反省会（グループ）において実習体験

を発表し、今後に向けての指導を行っている。11月から12月にかけては実習報告会を行い、3実習の体験から学んだことや反省点を1年生に伝える中で、実習体験を見直し今後の課題を確認させている。

Ⅲ. 結果

1. 令和6年度教育実習の実習評価

教育実習における実習評価表の項目数は15項目であり、実習態度が6項目、実習内容が9項目である。各項目5段階にて評価がなされており、評価最大得点は、合計75点、

実習態度 30 点、実習内容 45 点である。

教育実習に関して実習施設から示された結果の平均は、合計が 53.76 ($SD=10.10$)、実習態度が 22.68 ($SD=4.44$)、実習内容が 31.07 ($SD=6.26$) であった。

また、実習内容 6 項目は健康 4.27 ($SD=0.91$)・礼儀 3.73 ($SD=1.00$)・積極性 3.56 ($SD=0.95$)・責任感 3.87 ($SD=0.85$)・協調性 3.89 ($SD=0.99$)・探究心 3.37 ($SD=1.04$)、実習内容 9 項目は、幼児の理解 3.79 ($SD=0.91$)・環境の配慮 3.39 ($SD=0.88$)・指導計画 3.20 ($SD=0.80$)・保育の実践① 3.33 ($SD=0.83$)・保育の実践② 3.27 ($SD=0.83$)・保育の実践③ 3.40 ($SD=0.99$)・保育の実践④ 3.18 (SD

$=0.83$)・提出物等 3.74 ($SD=1.21$)・反省 3.80 ($SD=0.99$) であった。

これら 15 項目の平均値は 3.59、中央値は 3.56 であった。

2. 前年度教育実習評価結果との比較

R 6 年度教育実習の評価結果について、その高さを比較するために、R 5 年度との結果について比較した。

R 5 年度の教育実習評価は、有効回答数が 76 件であり、合計が 54.64 ($SD=11.73$)、実習態度が 22.91 ($SD=4.94$)、実習内容が 31.74 ($SD=7.06$) であった。

各項目の比較は、以下の通りである（表 4）。

表 4 令和 6 年度と令和 5 年度の実習評価の比較

	令和 6 年度		令和 5 年度		差	t
	平均	SD	平均	SD		
健康	4.27	0.91	3.91	0.89	0.36	2.025 *
礼儀	3.73	1.00	4.12	0.86	-0.39	1.838
積極性	3.56	0.95	3.61	0.81	-0.05	0.241
責任感	3.87	0.85	3.80	0.81	0.07	0.388
協調性	3.89	0.99	4.00	0.76	-0.11	0.510
探究心	3.37	1.04	3.47	0.84	-0.1	0.622
幼児の理解	3.79	0.91	3.87	0.80	-0.08	0.523
環境の配慮	3.39	0.88	3.57	0.70	-0.18	1.082
指導計画	3.2	0.86	3.24	0.69	-0.04	0.054
保育の実践①	3.33	0.80	3.41	0.72	-0.08	0.499
保育の実践②	3.27	0.83	3.29	0.71	-0.02	0.450
保育の実践③	3.4	1.00	3.43	0.76	-0.03	0.097
保育の実践④	3.18	0.83	3.26	0.65	-0.08	0.719
提出物	3.74	1.21	3.71	1.03	0.03	0.439
反省	3.8	0.99	3.96	0.78	-0.16	1.031

* $p<.05$ を示す。

R 5 年度の実習評価と R 6 年度の実習評価を比較した結果、R 6 年度と R 5 年度の評価において、態度の項目である「健康」以外に、

差は示されず、評価の結果として大きな変化は見られなかった。

3. 実習評価表と授業評価（GPA）

対象学生の GPA は、2 年生前期までの授業評価により示された GPA を対象とした。その最大値は 3.60、最小値は 1.49、平均値は 2.84（ $SD=0.48$ ）、中央値は 2.90 であった。

GPA と実習評価表について、2 変量の相関

分析を行った。その結果、GPA と実習態度ではピアソンの相関係数は $r=0.315$ 、 $p=0.004$ であった。GPA と実習内容ではピアソンの相関係数は $r=0.251$ 、 $p=0.023$ であった。GPA と実習評価合計ではピアソンの相関係数は $r=0.294$ 、 $p=0.007$ であった。

表 5 2 変量の相関

		実習態度	実習内容	実習評価合計
GPA	Pearson の相関係数	.315**	.251*	.294**
	有意確率（両側）	.004	.023	.007
	度数	82	82	82

Ⅳ考察

1. 前年度評価との比較

令和 5 年度と令和 6 年度の実習評価に大きな違いが見られなかったことは、実習施設である幼稚園が評価において一定の基準を維持し、安定した評価を行っていることを示唆している。これは、実習施設が評価基準の継続性と一貫性を重視し、評価の焦点が安定しており、妥当性と客観性を重視していることや、実習生の質的变化が少ないことなどが理由として考えられる。

1) 実習施設の評価の信頼

この結果は、実習施設による学生の評価に対して、一定以上の信頼を置くことが可能であることを示すものであると考える。

学生の評価のための明確な基準として、養成校が示している評価基準を用いながら一定の評価を行なうことで、評価者の主観による変動を抑え、客観的で一貫性のある評価が実現されていると言えるであろう。そして、複数の評価方法を併せて評価を行うことで、一人ひとりの個別的な実習の姿を捉え、学生個人の特性や特徴に応じた評価を行ない、より

妥当性の高い評価を目指していると考えられる。さらに、評価基準に関して、複数の評価者が関わりながら、一人のみの評価とならないように、十分な情報共有やフォローアップが行われているであろう、評価のばらつきを抑えるための工夫が各園において図られていると考えられる。その他には、前年度までの実習生の評価結果を基にしながら、安定した評価を客観的視点に基づいて維持する事ができるような工夫した取り組みを行っていると考えられる。

2) 実習生の質的变化の少なさ

養成校の実習事前指導における教育内容の安定化が図られ、カリキュラムや教育内容への大きな変化が見られていない。また、学内での学生への対応や指導に関して、大きな変化を A 短期大学において指導する教員が感じていない。学生の授業内における取り組みの様子や学びの特徴など、学生全体のレベルが前年度と比較して大きく変化していないことや学生の基本的な能力や資質に関しても大きな差が生じにくいいため、実習評価にも大きな影響を及ぼさない結果となったことが推測で

きる。学生が実習において取り組むべき内容について、養成校が適切に理解し、実習における評価の観点を学生の実習での学びと繋がるように指導することで、学生の基本的な実習態度や基本的な保育実践力が育まれている。そのため、前年度評価結果と比較した際に、大きな変化が生じなかったものと考えられる。

2. GPA と実習評価の比較

対象学生の GPA は、最大値 3.60、最小値 1.49、平均値 2.84 ($SD=0.48$)、中央値 2.90 という結果であり、平均値と中央値がほぼ一致していることから、GPA の分布は比較的正規分布に近い結果が示された。標準偏差が 0.48 であることから、GPA のばらつきは中程度であることから、対象学生の授業評価は一定の範囲内に分布しており、極端に成績優秀な学生や著しく成績不振な学生が偏っている状況ではないといえる。そのため、この GPA の分布は、分析結果の解釈において、極端な外れ値の影響を過度に考慮する必要がないと考えられる。

以下では、結果に従い、GPA と実習評価の相関について、示す。

1) GPA と実習態度

GPA と実習態度の間には、統計的に有意な正の相関関係を示しており、GPA が高い学生ほど、実習評価が良い傾向にあるといえる。実習態度は、実習への積極性や責任感、協調性、学ぶ姿勢、時間厳守、服装や身だしなみ、言葉遣いなど、実習に臨む姿勢全般を含むため、授業評価が良好な学生は、授業への取り組みを通して学習習慣や自己管理能力、目標達成意欲などを身につけている可能性があり、これらの能力は実習においても積極的に学ぶ姿勢や責任感、周囲との協調性として発揮されやすいと考えられる。例えば、授業で出された課題にきちんと取り組み、予

習復習を行う学生は、実習においても指示された業務を責任を持って遂行し、自ら課題を見つけて積極的に取り組む傾向にあることが推測される。

2) GPA と実習内容

GPA と実習内容の間には、統計的に有意な正の相関関係を示しているが、相関係数はやや弱い相関を示している。

実習内容は、指導計画の立案や保育実践、子どもへの関わり、教材研究、記録の作成、反省と改善など、実習における具体的な活動内容を示すものであるため、GPA が高い学生は、教科内容の理解度や学習指導に関する知識が豊富である可能性があり、それが指導計画の質の高さや適切な子どもとの関わり、適切な保育実践などにつながっていると考えられる。例えば、授業で学習理論や指導方法をしっかりと学んでいる学生は、実習において子どもの発達段階や特性に合わせた保育実践を行うことができるよう工夫したり、多面的な視点から多様な保育を取り組もうとする傾向があることが推察できる。

3) GPA と実習評価合計の相関

GPA と実習評価合計の間には、統計的に有意な正の相関関係を示されていた。これは、GPA が高い学生ほど、実習全体の評価も高い傾向にあることを示している。

実習評価合計は、実習態度と実習内容を総合的に評価したものであるため、実習態度と実習内容のそれぞれにおいて、GPA との間に有意な相関が見られたことから、それらを統合した評価である実習評価合計においても、同様に有意な相関が認められた。

これらの結果は、GPA に示される授業評価が実習におけるパフォーマンス全体とある程度関連していることを示唆しているといえる。

V. 総合考察

本研究の結果から、GPA は実習態度、実習内容、そして実習評価合計と弱いながらも有意な正の相関関係を持つことが示された。

これらのことから、授業評価は実習におけるパフォーマンスの一側面と関連している可能性が示唆された。学内での授業評価と実習の評価が相関関係を示すことは、学内での評価指標が外部での評価と重なりやすいことを示しており、学生への指導において、学外での姿を想像しやすく、実践開始前からの指導を丁寧に行いやすい結果が示されたと考えられる。しかし、相関係数が中程度以下であることから明らかなように、実習パフォーマンスは授業評価だけで完全に説明できるものではなく、他の要因、例えば、性格特性やコミュニケーション能力、個人のこれまでの経験や体験、実習施設的环境、指導教諭との関係、実習施設の特性なども複合的に影響していると考えられる。

特に、実習は実践的な活動であるため、知識や理解力は当然のこととして、状況に応じた判断力や柔軟性、子どもとの良好な関係を築くためのコミュニケーション能力などは、評価における重要な点となるであろう。これらの能力は、授業評価だけでは測りきれない部分であり、今後の研究において、さらに詳しい検討が必要となると考える。

今後の課題として考えられることは、①より多くの学生を対象に調査を行ない、統計的な検証を進め、より正確な相関関係を把握、② GPA 以外の要因、例えば、性格特性や過去のボランティア経験や見学等の参加状況、実習に対する準備、自己効力感、ストレスマネジメント能力なども調査し、実習パフォーマンスに与える影響の多角的な分析、③実習評価の方法や評価項目、評価尺度などを再検討し、より妥当性と信頼性の高い評価方法と

して、特に、実習態度や実習内容をより具体的に評価するための指標の検討、④量的研究だけでなく、実習生へのインタビューや実習担当教員へのヒアリングなどの質的研究を組み合わせることで、データから得られた結果の解釈を深め、より多角的な視点からの実習パフォーマンスの検証と分析といった、これら4点について、検証していくことが必要であると考ええる。

これらの課題に取り組むことで、授業評価と実習パフォーマンスの関係性をより深く理解し、効果的な保育者養成のための具体的な示唆を得ることができると考える。

VI. 参考文献

- 文部科学省総合教育政策局教育人材課 (2018)「教職課程認定基準等について」, 文部科学省
- 一般社団法人全国保育士養成協議会編 (2018), 保育実習指導のミニマムスタンダード ver. 2; 協働する保育士養成, 中央法規
- 新沼英明, 五十嵐睦美 (2021), 実習の適正評価に関する検討 (I) 実習評価と学内における学習状況等を比較して, 名古屋短期大学研究紀要第59号, 9-17
- 上村裕樹, 君島智子, 宮本美和子, 金野麻衣, 後藤さくら (2024) 教育実習評価表からみる教育実習学内指導の課題; R5 年度教育実習生の実習評価表から, 聖和学園短期大学紀要 61, 63-72.
- ショーン, D. 佐藤学・秋田喜代美 (訳) (2001)『専門家の知恵－反省的实践家は行為しながら考える』, ゆみる出版.
- 溝上慎一 (2007), アクティブ・ラーニング導入の実践的課題, 名古屋高等教育研究, 第7号, 269-287.
- 上村裕樹, 音山若穂, 和田明人, 利根川智子 (2014), 保育者養成学生の継続的学習意識の獲得に向けた問題解決型学習の試行, 帯広大谷短期大学紀要, 第51号, 217-22
- 上村裕樹, 音山若穂, 利根川智子, 工藤ゆかり, 滝澤真毅, 三浦主博, 織田栄子, 坂本大輔 (2017) グループワーク指向性が課題解決型学習に及ぼす影響; 保育実習見ご指導における取り組みについて, 地域福祉サイエンス 4, 105-115